月見草

北川瑞山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月見草

【Ｎコード】
Ｎ７９０９Ｒ

【作者名】
北川瑞山

【あらすじ】
某アイドルグループの某メンバーをモデルにした連載小説。
夢とは何なのか？
その儚さ、残酷さ、それでも人を惹き付けて止まない光輝。
夢に向かって迷わずに進む少女と、夢と現実の相剋に苦しむ青年の対比を通して描く。

プロローグ

栃木県下都賀郡壬生町。中央に黒川が流れるこの町は、度重なる市町村合併により、今では県内で最も人口の多い町となっている。といっても、この町に華美な様相は全くない。殆どが住宅、あるいは田畑であり、国道沿いに数件のファミリーレストランがあるくらいである。宇都宮近辺で働く人たちの、ベッドタウンと言っていいだろう。なるほど、東部宇都宮駅から壬生駅まで、宇都宮線で二十分ほどの距離であるから、生活に差し当たって不便はなさそうである。

しかし壬生駅を降りると、そのあまりにも閑散とした町並みに思わずぞっとしてしまう。スーパーや飲食店はおろか、コンビニの一軒すら見当たらない。少し奥まで行ってみると、あちこちに水田があり、絶えず家畜の糞尿の臭いが立ちこめている。黒川にかかる橋を渡り、さらに行くと、舗装されていない道路には脇に生えている樹木の枝が鬱蒼と垂れ下がって行く手を阻み、土だらけの道路は雨が降るととたんに足場が悪くなるであろうことが容易に想像できる。といって自然が豊かな景観であるかと言えばそうでもない。周りは企業を誘致してできたのであろう工場や倉庫がいくつも並んでいる、何ともうんざりする程人工的な、無表情な景色である。土地の人には申し訳ないが、かなり過酷な環境と言わざるを得ない。

そんな土地のずっと奥の方に、栃木県立壬生高等学校がある。その壬生高校に向かって、悪路などものともせずに歩き続ける一人の女子高校生がいた。名前は優子という。美人である。が、垢抜けない田舎臭さが漂う。そのあどけない表情と小柄な体格から、ともすると中学生に間違われそうである。それくらいに子供じみた可愛らしさがある。しかし、彼女の精神は、見た目から想像もつかないほど強靭である。彼女が後に日本中の人々を魅了する事になるその根本は、この強靭な精神にしかあり得ない。こういった環境が、彼女

の精神を育んでいたのだと考えると、この土地の殺風景さにも何やら不思議な力を感じるのである。

優子の夢

「優子、そろそろ起きなさい」

父親の声がする。優子の実家は寿司屋である。父親はネタを仕入れたり、仕込みをしたりで、朝早くから忙しい。優子はそんな父親とは打って変わって朝が苦手である。

（もうこんな時間か）

まだ昨日の疲れが残っている。が、学校を休むわけにはいかない。眠い目をこすりながら、優子はゆっくりと起き上がった。

（今日も学校終わったら、レッスンに行って…）

身支度をしながら今日一日のスケジュールを思い浮かべる。

優子は今、高校二年生、十七歳である。この歳の女子高校生にしては、かなり多忙な毎日を送っている。近所の壬生高校に通いながら、東京で芸能活動もしているのである。一日の流れとしては、朝早く学校に行き、学校が終わればその足で東京へ一時間以上かけて出向く、そしてその日のレッスンや公演をこなし、それが終わると、また壬生の自宅に帰るというスケジュールである。自宅に着く頃には、すっかり夜も更け、電車を降りて駅を出ると、もう殆ど人影もないほどに町は暗く静まり返っている。もしかすると普通に働くサラリーマンよりも忙しいかもしれない。自分の足音だけが響くような寂しい町の路上、街灯の明かりの下で、優子は今日一日を振り返る気力もないほどに疲労困憊である。これがほぼ毎日である。

これだけのハードスケジュールこなす気力・体力が、この小さな体のどこに宿っているのであろうか。恐らく、それは彼女の価値観、あるいは行動原則というべきものに起因しているのだろう。優子には、長年抱き続けた夢がある。世界に通用する女優になるという夢である。そしてその夢のためならどんな労苦も厭わない。これが彼女の行動原理であり、心のよりどころであった。だからこそ、どんなに過密なスケジュールでも、体力が底をつきそうでも、優子は前

だけを見据えて歩き続ける事ができた。もっとも、こういった精神面での強さを、優子は一朝一夕で手に入れた訳ではない。夢を追い続ける人の強さ。それは優子がまだ幼い頃から、現在に至るまで徐々に積み上げられてきたものである。

優子の俳優としてのキャリアは、彼女が七歳の頃から既に始まっている。子役として役者人生をスタートさせたのである。優子の夢の萌芽は、この頃に起こったと考えるべきだろう。しかし、その後様々な形でメディアに出演するも、これと言って大きな役柄を与えられず、優子自身「女優としての芽が出なかった」との諦念を抱くようになる。

諦めかけた夢。一旦はそれを振り切るようにして、優子は日常生活に埋没していった。だが何故だろう。諦めようとすればするほど、日増しに夢への想いが強くなっていくではないか。優子は、まだ夢を諦めきれない自分が、心のどこかで息づいている事に気がついた。しかしそうは言っても、これからどうすれば良い？日常に生きる優子にはなす術も無く、しばらくの間優子には夢と現実の狭間で彷徨っているような日々が続いた。優子という人は元々、夢に向かって邁進しているときに最も輝く人物である。そういう優子にとって、目標の定まらない毎日はさぞ辛かったに違いない。

２０００年、優子は十二歳の頃より、ジュニアアイドルとしての活動を行っている。目指していた女優の道から少し外れるが、ひょっとすると何らかの足がかりになるかもしれない。何より夢に近づくための努力を続けていきたい。一歩でも前に進んでいたい、という想いによるものである。結局、優子は約六年間ジュニアアイドルとして活動を続ける。これはさして表立った活動ではなかったが、この時期に培った実力が後の栄達に繋がっている事を考えれば、優子という人はつくづく努力の人である。

ところが、高校二年生になった頃、優子は再び自身の進路に悩む事になる。この時期における進路の悩みとは、それまでのキャリアを問わずして起こりうるものらしい。優子のジュニアアイドルとし

ての活動は順調であったが、その先が見えない。永久にアイドルとしてやっていけるはずもない事は優子自身分かっていたし、それどころか現時点でも満足に仕事のオファーは来ていないのである。正に五里霧中と言って良い状況下で、努力をしようにもその方向性すら掴めない。優子の懊悩はこうした状況を鑑みれば当然と言える。そんな事もあり、一度優子は手話通訳士かあるいは介護福祉士になろうと、福祉の専門学校に進学する事を決意する。

が、そんな時に、現在優子が所属するアイドルグループのオーディションの話を耳に入れるのである。未だ夢への未練を断ち切れずにいた優子は、そのオーディションを最後にその未練を断ち切ろうとする。つまりこのオーディションに落選したら、二度と夢を振り返る事はせずに新たな道を進む事を心に誓うのである。ところが、乾坤一擲で臨んだオーディションに、優子は見事合格する。恐らく凄まじい倍率の競争であったに違いないが、運命は優子に微笑んだのである。

そして２００６年４月、優子は当該アイドルグループに加入する事になり、現在に至るという訳である。

夢と現実の往来

「じゃ、行ってきます」
父親に告げて、優子は家を出た。優子には兄がいるが、兄の姿は見当たらない。まだ寝ているのだろうか。
ちなみに、優子の両親は優子が小学生のときに離婚している。以来、優子は父子家庭で育っている。男親と男兄弟の中で育ったせいか、優子は趣味や性格、口調までがどこか男っぽい。例えば、優子の私服は殆どがジャンパーやパンツなど、カジュアルでラフなものが中心で、靴はいつもスニーカーである。フェミニンな印象のスカートやハイヒールなどは冠婚葬祭の時ぐらいしか身につけない。元々派手に着飾ったりする方ではないのだろう。「外見よりも実力で勝負する」という優子らしい選択である。
「優子、おはよう」
黒川に架かる橋の手前で、優子は級友に声をかけられた。
「ああ、おはよ」
優子には友達が多い。通学の途中で、優子はいつも誰かしらに声をかけられる。級友との会話はいつも他愛もない話だが、優子の周りには一人また一人と人が集まってくる。そうして学校に着くころには、いつの間にか結構な大所帯になっていることも多い。優子には友達と遊ぶ暇もなければ、テレビを見る暇もない。級友達との共通の話題には当然乏しいはずである。だが優子には天性の明るさと、竹を割ったようなさっぱりとした性格があった。それだけで皆、引き付けられるように優子の周りに集まってくるのである。
また、こんなエピソードがある。優子の級友で、バンドを組んでいる女子生徒がいた。彼女が優子に近寄ってくるなり、こう嘆願した。
「優子、お願いがあるんだけど、うちのバンドで今ベースが必要なのよ。優子はリズム感良いし、舞台慣れもしてそうだし、ベースを

やってくれないかな?」
優子はベースなど触った事もない。それどころか楽譜が読めるかどうかも心配なくらいである。しかし、優子は即答する。
「いいけど、私、楽器なんてやったことないぞ」
優子は、頼られると断る事のできないタイプである。一見サバサバしているようで、実は情に厚い姉御肌だったようだ。優子のそんなところが、多くの人望を集める所以となっているのである。
ちなみに優子はこの後、忙しい合間を縫うようにしてベースを必死で練習する。ベースの大きなフレッドが優子の小さな手には辛かったし、太い弦が指にめり込んで痛い。が、そんな事は表情にも出さず、優子はベースを練習した。それは偏に「他人にものを見せるからには、それが何であっても最大の成果を上げなければならない」という優子独自のプロ意識からくるものであった。もっとも、優子は単なる人助けとしてこうした役を引き受けた訳ではない。優子はあらゆる事象を「女優になる」という夢の実現のためのワンステップとして位置づけている。優子の言う「女優」とは、単なる役者の事ではない。どこからどんな仕事が降ってこようともそれを受け止められる、人間としての幅の広さを、優子は「女優」の二文字に込めている。万事がその調子だから、優子のチャレンジ精神は欲張りと言っていいほどに旺盛であった。結局優子はベースを弾きこなし、バンドのライブも成功を収めた。それどころか、これよりずっと後の話になるが、アイドル数人でバンドを組む企画がなされた時、ベーシストにはいち早く優子が抜擢され、歌って踊れて楽器もできる「マルチタレント」の称号を与えられるのである。
優子の学校生活は、そんな訳で一際賑やかなものであった。お転婆娘という言い方は古くさいだろうか。優子の周りには常に人がいて、笑い声が絶えない。必ず周囲から笑いを取らないと気が済まない性格なのである。この辺りは優子のタレント性と直結しているだろう。唯一悩みがあるとすれば、優子は勉強があまり得意ではないという事である。特に理数系の科目となると、手も足も出ない。勉

強をする時間がないというのも一因だろうが、そもそも学問自体に興味がわかないのである。定期試験を受けるたびに、優子は思う。

（こればっかりはどうも駄目みたいだな）

この時ばかりはさすがに、優子も弱気になる。とはいえ、判断の速い優子の事である。可能性がないと分かったらすっぱりと見切りをつける。後は気にもしない。

（高校卒業まで漕ぎ着ければいい。落第点さえ取らなければ良いだけの話だ）

そう結論付けて、後はすっかり忘れているのである。

登校時と打って変わって、下校時の優子は一人である。級友は皆部活動に勤しんでいるが、優子は一人学校を後にし、東京へ向かう。無論、芸能活動のためである。この時、恐らく優子は言い知れぬ孤独を味わったであろう。もちろん、優子はそんな素振りも見せない。だが、沈みかけた夕日に輝く黒川のせせらぎの照り返しを受けると、彼女の孤独は柄にも無い哀愁を帯びて彼女の瞳に蘇る。優子の心は、常に「夢」という時間も空間も超越したところにある。級友とはしゃいでいる時でさえ、優子の心はそこにないのである。一人になった時、自分の心がここにない事に改めて気づかされる。心はいつも「夢」という非現実の周りを孤独に彷徨っているのである。

東京には、東武宇都宮線の壬生駅から各駅停車の電車を乗り継いで向かう。この路線で東京に行くには、片道二時間程度を要するため、この往復の時間が優子に与えられた数少ない休息の時間である。もっとも、行きの電車の中で、優子が休息を取っている事は少ない。殆どの場合、その日のレッスンや公演のイメージトレーニングをしている。周囲の目線を気にしながらではあるが、その日のダンスの動きなどをチェックしているのである。東京に着く頃には、優子は大方の予習、復習を終えている。こういった小さな努力を積み重ねる事に、優子は余念がない。

レッスン中、優子は実に寡黙である。いつもは仲間とはしゃいだりふざけ合ったりしている優子だが、レッスンの最中だけは人が変

わったようである。レッスン中に初めて優子を見た人の話などを聞くと、「最初は大人しい子かと思った」という意見が大半である。優子のその真剣な眼差しに、尊敬の念を抱く同輩、後輩も多い。優子にとって、「夢」とは言うまでもなく、叶えるためのものである。しかし同時に、叶う叶わないは優子にとって大した問題ではない。その一点に向かって命を燃やし続ける事が自分にとっての宿命であると、優子は考えている。殆どの場合、本番とはステージに立ってパフォーマンスをする時の事を指しているが、優子にはそこに至るまでのプロセスこそが本番だと思われるのである。

もっとも、こうした考え方がいつでもプラスの方向に働く訳ではない。考え方が頑固なために、他のメンバーとぶつかる事も多い。優子にはどうしても、他のメンバーがやる気、集中力に欠けているように見えてしまう。他のメンバーにしてみれば、人それぞれのペースでやっている訳で、決してやる気がない訳ではない。むしろ懸命に取り組んでいるつもりなのである。しかし人一倍意識の高い優子にはそれが分からない。優子は時々本心を口に出し、その度にメンバーと喧嘩になる。優子はチームワークという美名の下に、足を引っ張られているような気さえする。そういうとき、優子は内心、

（辞めてしまおうか）

と思うのである。優子は元々、一人で芸能活動をやってきた経歴がある。女優として活動する事を目標にするのであれば、そのまま一人で活動していても良さそうであるが、優子は敢えてグループで活動する道を選んだ。その理由としては、大体のアイドルがそうであるように、やはり足がかりとしての意味合いが強かった。世間一般、あるいは業界内での知名度を上げ、より有利なポジションから夢を追う事が出来る事を期待しての選択である。であるから、優子にしてみればそこで足を引っ張られていては本末転倒なのである。

（一人でやっていた方が良かったのかも知れない）

こうした葛藤を胸中に抱きながら、優子は帰宅の一途を辿る。とはいえ、帰りの電車の中で寝ているうちにそんな事はさっぱりと忘れ

て、壬生に着く頃にはもう、次の日の事を考えているのである。優子の精神力の強さは、案外こういう忘れっぽさに起因しているのかもしれない。「振り向くな。後ろには希望がない」と誰かが言っていたが、優子は、常に遥か前方にある一点の光を見据えている。その心の光が、真っ暗闇の中でも四六時中、消える事がない。それだけで優子は何も恐れずに生きていけるのである。ざっと、これが優子の日常である。

父親の存在

「優子、いい加減起きなさい」
父の声がする。
「・・・ん？」
優子は寝起きが悪い。いくつになってもこればかりはどうしようもないらしい。
「疲れてるのは分かるけど、頑張って。今日は金曜だから、今日を乗り切れば学校も休みだ。さあ、頑張って起きな」
「んー、はいはい」
優子はあくびをしながら伸びをして、ゆっくりと身支度を整えだす。体は動いているものの、頭はまだ働かない。何も考えずに惰性だけで身支度を整えると、すぐさま父のいる階下に下りていく。
「おはよう」
「おはよう、優子、朝ご飯できてるから、食べていきなさい」
優子の父は、優子にとってこの上ないサポーターであり、理解者である。優子が中学生の時に離婚して以来、父親は男手一つで優子を育ててきた。片親で育つ事になった優子を不憫に思ったのか、それを補って余りあるくらいの愛情を父は注いできた。優子がやりたいと言う事は何でもさせてきたし、優子の夢も理解し、賛同し、惜しみない支援をしている。優子はきっとすごい女優になるぞ。そう信じて疑う事がない。優子はそんな父親が好きである。年頃の娘は父親には懐かないものであるが、優子の場合逆である。普段は孤独な心を明るく振る舞う事でひた隠し、仮面を被ったような日常生活を送っている優子であるが、父親にだけは素の自分を見せられる。絶対の信頼を寄せているのである。少し話が横道にそれるが、優子の男性観というのは、相当に偏っている。筋肉だったり、髭だったり、あるいは運動部のかけ声だったり、あくまで男性的な部分にのみ魅力を感じるのである。中性的な男性にはあまり魅力を感じないらし

い。そればかりか女性である自分自身も、あまり女性的になりたいとは思わない。とにかく自分を飾ったり、可愛らしく振る舞ったりするよりも、自然体でいることが性に合っているようだ。アイドルという立場でありながら、後に女性からも絶大な支持を受ける優子の魅力はこういうところから派生していると考えられるだろうが、それはもしかすると父親に育てられた影響であったのかもしれない。

優子は朝食をとりながら、父親と話す。

「優子、学校はどうだ？順調か？」

「まあどうってこともないよ。程々にやってるよ」

「この間の試験の結果見たぞ。あれで卒業できるのか？」

「あれね、向いてないんだよね、ああいうの」

「そんなこと言って、留年なんてことになったら大変だぞ。仕事の方にも影響するだろうし…」

「そうなったら中退するよ。今だって何で高校に行かなきゃいけないのかよくわからないし」

「あのなぁ、今時高卒の資格ぐらい取ってないと、後々つぶしがきかないぞ。このご時世、備えがあるに越したことはないんだから」

「そんな保険かけてるみたいな生き方したくないの。私は将来を決めてるんだから、もうそれしか考えられないの。」

優子の進路は、今や芸能一本に絞られている。優子の表情に迷いは欠片も見当たらない。

「そりゃあ、お父さんだってそうなれば一番いいと思うよ。けどな…」

「ごちそうさま。じゃ、行ってくる」

優子は鞄をひっつかむなり、足早に出て行ってしまった。父親の作ってくれた弁当も忘れずに鞄に入れていったようだ。優子の父親は、そっと優子の後ろ姿を見送った。優子の一本筋の通った生き方が、父は実のところ大好きである。親として不安ではあるものの、同時に、さすが我が子だ、思うのである。

狷介な孤独

優子が学校に着くと、早速級友の一人が駆け足でやってくる。
「優子、ちょっと話があるんだけど」
「ん？何？」
「ここじゃ難だから、後でちょっと付き合って」
「何だよ。もったいぶって」
優子は笑顔のまま言ったが、内心嫌な予感がした。あまりおおっぴらに出来ない話となると、大方恋愛沙汰の話か何かだろう。そんな話に付き合うと碌な事がない。頼られると断ることの出来ない性格上、優子は今まで何回かその類の相談に乗ってきた。だが他人の色恋沙汰ほどどうでもいいものはない。そのくせセンシティブな問題だけに神経を使うし、巻き込まれると面倒である。そんなことを思いながらも優子は、
（話だけでも聞くか）
と、つい相談に乗ってしまうのである。自分の面倒見の良さに、優子は自分で呆れてしまう。
休み時間、優子は先ほどの級友に連れられて、廊下の隅のあまり人通りのないスペースまで移動した。
「優子、今度の日曜なんだけどさ、友達の伝手で合コンやることになったんだ。優子も来る？」
「なんだ、そんな話か」
優子は拍子抜けした。
「なんだってことはないでしょ。まだ人数足りてないし、ね、お願い、来て」
「いや、そんなら私はパス。仕事あるし、第一私はそういうの向かないよ」
「向き不向きなんてやってみなきゃわかんないでしょ。仕事なんて一回くらい休んじゃっても大丈夫だよ。体調悪いとか言ってさ。運

命の出会いがあるかも知れないんだよ」
「仕事は休めないんだよ。運命の出会いって何だよ」
「優子、あんた結構もてるんだから。勿体ないよ、チャンスを粗末にしちゃ」
「私は今忙しいの。パスったらパス」
「…もう」
優子にしてみれば、合コン自体に興味がないのだが、更に重要な事は、優子が所属しているアイドルグループにおいて、恋愛が禁止されていることである。合コンがこの「恋愛」に該当するかどうかはわからないが、行きたくもない合コンに行って、みすみす瓜田に靴を入れることはないのである。さすがに優子もこの件に関しては断らざるを得ない。
もっとも、優子は合コンというものにかつて参加した事がない。優子には合コンなど不要なのである。好きになった異性がいれば、きっかけなどなくとも想いを伝えれば良いだけの話である。合コンという人為的に作られた出会いの場において、ランダムに選ばれた異性の中で妥協点を見つける事など、優子には到底考えられない。恋愛に関しても仕事同様に生真面目な考えを持っているのである。
学校生活は、優子にとって空虚そのものである。友人は多い。笑い声は絶えない。だが夢に向かっていない。なぜ今自分はここにいるのかわからない。心に空いた穴を埋めることが、学校にいてはどうしてもできないのである。優子は友人を軽んじている訳ではない。友人は好きである。自分は友人に会うために学校に来ているのではないかと思うほどである。だがその程度は自分の夢を愛するほどではない。友人はたくさんいても、肝心の自分自身がいない。学校とは、優子にとってそんな場所である。
下校の時刻、優子は東京に向かう。東京に向かう電車の中で、黄色い声を上げる女子高校生の集団を見かけた。お互いのプリクラを見せ合って、何やらはしゃいでいる。優子も何度か友人と同じような事をした記憶がある。しかしその時も、学校にいる時と心の中は

全く一緒で、空虚さを紛らわす事ができなかった。その時の写真は今も優子の手帳に貼ってある。そこに写っている優子の笑顔は、屈託なく、無邪気にほころんでいた。優子はその笑顔を見るたび、自分の作り笑いの巧みさと、言いようのない寂しさに、溜息が漏れる。そしてその後、少し自嘲気味に笑ってみるのである。

レッスンの調子は、今一つであった。集中力が続かないのである。気を抜くとすぐに次の振り付けが思い出せなくなる。

（私もまだまだだな）

レッスンが終わった後も、優子は鏡の前で自主練をしていた。玉の様な汗が夜露さながら優子の頬を流れ落ちる。優子は自分が納得できるまで、練習を終える事が出来ない性格である。「居残り組」というとレッスン中に振り付けをマスターできなかった人が居残る事を指すが、優子は言わば「自主的居残り組」である。その日は結局、最後の一人になるまで練習をしていた。

（そろそろ上がるか）

優子が思った時には、終電も近い時刻になっていた。

（まずいな。終電間に合うかな）

この稽古場から最寄りの駅まで相当に時間がかかる。駆け足で行ってもかなりぎりぎりだろう。優子はロッカールームで素早く着替えをして、稽古場を後にしようとした。そのときだった。

「優子ちゃん」

後ろから声がする。誰だろう。わからないが今は時間がない。

「ごめん、今急いでるんだ」

早口で言うと、また後ろから声が聞こえる。

「優子ちゃん、家遠いんでしょ。もう遅いから、今晩うちに泊まりに来なよ」

優子にしてみれば思ってもみなかった誘いである。

「いや、ダッシュで行けばまだ間に合うから、大丈夫」

といって振り返ると、普段稽古場で一緒にレッスンを受けている、と言っても一言も話したことのないメンバーの姿があった。

「でも、外雨降ってるよ。今日中に帰るのって大変じゃない」
確かに外を見るとバケツをひっくり返した様な驟雨が降りしきっている。栃木も夜から雨が降ると、天気予報で言っていた記憶がある。終電に間に合ったとしても、壬生駅から自宅まで歩かねばならない。雨の中あの距離を歩くのはかなり大変だ。優子が考えあぐねていると、もう一声あった。
「明日土曜日だし、学校もないでしょ。ね、そうしなよ」
なんて優しい子なんだろう。優子は、何か温かいものが心にこみ上げてくる様な感覚を受けて、言葉に詰まった。母親と離れて暮らしているせいだろうか。優子は同性からの愛情に弱い。なんだか柄にもなく涙が出そうである。
「…うん、ごめんね。じゃあそうさせてもらっていい？」
優子はもじもじと切り出した。
「うん、じゃあ私着替えてくるから、ちょっと待ってて」
と言ってチームメイトはロッカールームに入っていった。優子は、今日は友達の家に泊まる、と父親にメールを打った。

名無しの友人

「お待たせ。じゃあ行こうか」
2～3分後、稽古場の玄関にチームメイトが現れた。外を見ると真っ暗である。通り過ぎる車のヘッドライトが暗闇を照らすたびに、大粒の雨が降り注いでいるのが見える。二人は玄関から外に出た。
優子は持ってきた折りたたみ傘を開きながら言った。
「すごい雨だ。傘差してても濡れそう」
「ほんと、嫌になっちゃう」
二人は傘を差し、肩を並べて歩き出した。
（まずい）
優子は困ったことに気がついた。
（この子何ていう名前だっけ？）
優子はしばらく考えていたが、どうも思い出せない。優子はレッスンの最中、黙々とダンスの練習に取り組んでいるため、他のチームメイトとはあまり話さないし、他の人の話し声も聞こえてこない。実を言うと優子が名前を知らないチームメイトは他にも数人いるのだが、今までそれで困ったことはなかった。しかし今回はそうもいかない。何とか上手く誤魔化すしかない。優子はいつになく多弁になった。
「あのさ、今日のレッスン難しくなかった？私全然覚えらんなくって、居残りしてたんだけど、まだ自信ないわ」
「だよね。途中でほんとに訳わかんなくなっちゃう。でも優子ちゃんは偉いよ。あんなに出来てるのに居残りで自主練までして」
「出来てないって。顔だけは出来てる風な顔してすましてるけど」
「ふふ。でも優子ちゃんがやるとキレが全然違うよ。運動神経良さそうだもん」
「その分物覚えが悪いから苦労してんだけどね」
二人が談笑しているうちに、もうチームメイトの家に着いた。

（こんなに近いのか）
優子は率直に言って羨ましかった。自分もこれだけの近所に家があったら、どれだけ時間を有効に使えるだろうか。家は普通の一軒家だったが、優子の家と違い洋風な造りであった。
「どうぞ、上がって」
「お邪魔します」
優子はお辞儀をしつつ、中に入った。
「家族いるけど、気にしないで」
「うん」
玄関の扉が重々しく閉まると、よその家の臭いがした。チームメイトが明かりを付けると、玄関のシャンデリアが煌々と輝いた。居間のドアを開けると、チームメイトの母親らしき人物がいる。
「お母さん、ただいま。今日は友達と一緒なんだ。今晩泊まる予定だから、よろしくね」
チームメイトの横から顔を出して、優子は挨拶をした。
「すみません、今晩お世話になります。よろしくお願いします」
優子は頭を下げた。
「あら、いらっしゃい。何もお構いできないけど、ゆっくりしていって頂戴ね」
母親は笑顔をたたえ、上品な口調でそう言った。
「じゃあ、私の部屋に行こうか」
チームメイトはそう言うと、居間の扉を閉めて、階段を上り始めた。
優子もそれに続く。家の中は香水の様ないい香りがする。
（立派な家だな）
優子はきょろきょろと辺りを見回しながら階段を上った。間接照明の柔らかな光が、何とも妖しげな雰囲気である。
それにしても、優子はまだチームメイトの名前が思い出せない。家の前に着いたとき、表札を確認すれば良かったと、優子は後悔したが、後の祭りである。
ドアを開けると、そこがチームメイトの部屋だった。入ると、そ

こだけ空気が変わったように少女趣味一色の部屋であった。まず基調がピンクである。カーテンやらベッドやら布という布にフリルが付いていて、何やらぬいぐるみが多数おいてある。優子にしてみれば、むせ返るほどのガーリーさである。殺風景な優子の部屋とは正反対の趣味だ。唯一少女漫画が棚に並んでいるところが共通点か。

「可愛い部屋だね…」

優子は異国に来たような心地がする。

「そうでしょ。私がコーディネートしてるの。ちょっと個性が強く出過ぎちゃってるかも知れないけど」

「いや、個性が強いのは良い事だよ。私の部屋なんて没個性だからさ」

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しい」

そうこうしているうちに、一匹の猫が部屋に入ってきた。しゃなりしゃなりと歩く上品な猫である。それが部屋の雰囲気にぴったりとマッチしていて、何ともお洒落だ。優子は小動物が大好きである。優子も家でウサギを飼っている。早速、優子の足下に猫が絡み付く。

「お、猫がいるんだね。可愛い。なんて名前？」

「ミミちゃん。あんまりよその人には懐かないんだけどね。優子ちゃん気に入られてるみたいよ」

「えーほんとに」

優子が人差し指で猫の頭をなでていると、今度は四、五匹の猫がわらわらといっぺんに入ってきた。優子はあっという間に猫の群れに囲まれた。

「優子ちゃんって動物に好かれるのね」

チームメイトは感心した様子で言った。

優子はその場に座り込むと、猫の一匹を頭の上に乗せ、両脇にも猫を抱え込んだ。

「あはは、大猟大猟」

二人の緊張がこうして解かれていった。どこからが「友人」と言えるのか、その境界はわからないが、二人は友人になったと言ってい

いだろう。もっとも、優子はまだ名前を知らないが。

幸福と迷い

その時、部屋のドアが開き、チームメイトの母親が顔をのぞかせた。

「お夕飯できたんだけど、よかったらお友達も一緒に召し上がらない？」

そういえば優子は夕飯を食べていなかった。レッスンの後だけあって、かなり空腹である。

「優子ちゃん、食べていくでしょ？」

「あ、はい、ありがとうございます。ではお言葉に甘えて」

優子は立ち上がると、恭しくお辞儀をした。

階下に降りると、既に夕飯の支度が出来ていた。いい匂いがする。食卓には色とりどりの夕食が並べられている。

（これはまた豪勢だな）

優子は日ごろ夕食を一人で済ませている。家に帰ってから父親の作ってくれた夕食を口にするのだが、一人で食べる上に作ってから時間が経ってしまっているため、できたての美味しさを味わう事が出来ない。食卓から湯気を立ち上らせている食事に、優子の目が輝く。ふと見ると、居間で恰幅のいい中年の男性が座ってテレビを見ていた。父親だろう。

「あの、こんにちは。お邪魔しています」

優子は挨拶をした。

「こんにちは。ゆっくりしていってね」

それ以上、父親は何も言わず、居間の隅っこでテレビを見続けた。邪魔にならないようにと気を遣っているのかもしれない。

食事の用意が整うと、家族全員が食卓に集まってきた。父、母、チームメイト、優子の四人である。橙色の明りの下、食卓を囲む。

（一人っ子なのかな？）

優子は考えたが、それでも普段、蛍光灯の青白く冷たい明りの下で

一人夕食を摂る優子にしてみれば、華やかな食卓に変わりはない。
「いただきます」
食事が始まると、優子は食べるのが速い。母親が、
「遠慮しなくていいのよ。どんどん召し上がって頂戴ね」
と言ってくれたが、言われるまでもなく優子は遠慮などしていない。
おおよそ十分やそこらで、出されたものを全て平らげてしまった。
「お代わりを持ってくるわね。召し上がるでしょ？」
母親が勧めてくれる。
「あ、はい、お願いします。」
優子は答えると、茶碗を差し出した。
「わはは、いい食いっぷりだな」
父親がビールを飲みながら、愉快そうに笑った。
「いやぁ、こんなに美味しい食事は初めてなもんで」
優子は本心からそう言った。母親はなかなかの料理上手らしい。
「そうかそうか、いや、成長期なんだから、うんと食べたほうがいいんだよ」
父親は嬉しそうに言う。
「恐れ入ります」
優子は二杯目の茶碗を受け取ると、それもすぐさま平らげた。チームメイトのほうはまだ一杯目も食べ終わっていない。
「ごちそうさまでした。本当に美味しかったです」
「あら、とんでもない。そんなに喜んでもらえると嬉しいわ。またいつでも食べにいらしてね」
母親は笑顔で言ってくれた。
（これなら毎日でも食べに来たいな）
優子は一瞬本気でそんなことを考えた。むろん、そんなわけにもいかないだろうが、優子は今日という日に心から感謝していた。優子は食べ物につられるタイプであったかもしれない。そういう単純なところが、優子の愛嬌でもある。
（しかし、さっきから家族の会話がないな）

優子は食べ終えてから、ずっとそう感じていた。かといって一人で席を立つわけにもいかず、手持無沙汰に座っていた。皆テレビを見るでもなく、黙々と食事をしている。

（私がいるから皆気を遣ってるのかな）

そう思うと居ても立ってもいられない。優子は立ち上がり、父親にビールを注いだ。勢い余ってグラスから溢れそうになるのを、父親が口で受け止める。

「ははは、ありがとう」

「いいえ、とんでもないです。それで…、今日一晩御厄介になるお礼と言ってはなんですが…」

言うが早いか、優子は居間に立てかけてあるギターを引っ掴み、抱えてソファーに座った。

「一曲披露します。下手くそな歌ですが、これでも私、バンドもやっているんです」

皆きょとんとした顔をして優子を見ていたが、優子は構わずギターをかき鳴らす。アコースティックナンバーは優子の得意分野である。お気に入りの一曲を、優子は歌った。ギターを弾く指が多少覚束なく、声はかすれ声だったが、それが優子の愛嬌と相俟って、聴く者の心を掴むような魅力を帯びる。

渾身の力を込めて、歌い終えると、優子は一つ溜息をつき、笑顔でこう言った。

「ありがとうございました」

と、一家を見まわした。その時、拍手が沸いた。いつの間にか一家に笑顔が灯っている。

「優子ちゃんすごい！」

チームメイトは拍手を送りながら、優子を称える。

「いや、なかなかいい歌だったな。私も昔そういう歌をやったもんだがね。久しぶりに感動したよ」

父親が感慨深そうに腕を組んでうなずいている。もっとも半分はお世辞だろうが、優子は満足げにこう言った。

「ありがとうございます。それではご好評に与りまして、次はお父さんの世代の歌をやりたいと思います」

おだてられるとすぐ調子に乗る性格なのである。優子は自分の父親のよく聴いている古い歌をコピーしたことがある。それをやってみようと思った。チームメイトの父親は音楽をやっていたそうだから、古い歌ならきっと知っているに違いないと踏んだのである。優子はギターをつま弾きながら、ゆっくりと渋い声で歌い出す。

（何て芸達者な子なのだろう）

その場にいた誰もがそう思った。事実、父親などは何故こんなに古い曲を知っているのかと、驚いた様子で優子の歌に聞き入っている。演奏はというと、先ほどよりも指先は覚束なく、演奏が途切れ途切れである。そればかりか歌詞をところどころ覚えていないため、そういう箇所はハミングで誤魔化している。自信がないならやらなければいいのに、とは誰一人思わない。自信もないのにやってしまう、優子の度胸と可愛らしさ、あるいはチャレンジ精神と言ってもいいかもしれないが、そういうものに皆惹きつけられていく。

優子が歌い終わった時、ビールをなめていた父親が立ち上がり、優子にこんなことを言った。

「優子ちゃん、一緒に飲まんかね？」

チームメイトが慌てて遮る。

「お父さん、私たち未成年なんだよ。変な冗談はやめて」

「そうか。それは残念だ。じゃあ私も一曲やるぞ」

それからというもの、優子は父親の懐かしのヒットメドレーに付き合った。チームメイトも一緒にいて、よほど楽しそうに、始終笑いあかした。父親のこんな姿を、目にしたことがなかったのかも知れない。それが終った頃には、既に時刻は十二時を過ぎていた。チームメイトと優子は部屋に戻り、すぐにそれぞれの床に就いた。お互いに風呂に入る体力を失っていたのである。部屋の明かりを消してそれぞれが布団の中に入った後、暗闇の向こうからチームメイトが話しかけてきた。

「ねえ、優子ちゃん」
「何？」
「優子ちゃんはなんでアイドルのグループに入ってるの？優子ちゃんみたいに何でも出来たら、一人でもやっていけそうなのに」
「一人でやっていくには、私には何もかも足りないよ。チームメイトから刺激を受けたり、厳しいレッスンを受けたり、そうやって成長していかなきゃいけないと思うんだ」
「私にもそんな向上心があったらなぁ。私だって歌もダンスも上手くなりたいとは思うよ。だけどきついレッスンを受けてる最中とか、もう辞めたいなって思うこともあるんだ。何のために私はこんなに辛い思いをしてるんだろうって、時々分からなくなる。最初は華やかさに憧れて入ったけど、思ってたのと違ってたっていうか…。こんな中途半端な気持ちで続けるくらいなら、もっと学校の勉強とかしっかりやった方がいいのかなって、迷うこともある。駄目だね…、単に憧れだけで入っちゃうと、モチベーションが持たないのかも知れないね…」
「最初は憧れだけでいいじゃんか。私だって迷うことはあるよ。昔は単に女優になりたいって思ってた。憧れてたんだ。けど今は少し違うんだ。よくわからないんだけど、女優っていうより、もっと自分にしかできない何かなんだ。それが何て言うのかわからないから、とりあえず女優って言ってるけど…。だから今やってることが役に立つかどうかも分からないし、辞めたいって思うこともある。でもそれを続けてるうちに、自分の目指すものが見えてくる気がするんだ。今の私にできることはこれしかないって思うんだ。続けてるうちに見えてくるものもあると思う。そりゃ学校の勉強はした方がいいと思うよ。私はしてないけどさ…。ま、とにかくさ、お互い続けていけば何か見えてくるよ。一緒にやっていこうよ。ね。」
優子の目指すものとは、つまるところ自身の多彩な能力を余すところなく発揮できる場所である。マルチタレント、という言葉が近いだろうか。当時の優子にそういう語彙はなかったが、もし知ってい

たとしても、それで優子が納得したかどうかは分からない。
「うん…、優子ちゃん、私もう少し頑張ってみるよ。今度一緒に自主練しよう」
「うん、いつでも付き合うよ。何かあったら何でも言ってよ。愚痴でも何でも聞くよ。あとさ、ごめん」
「ん？」
「ずっと聞けなかったんだけどさ、名前、教えてもらってもいい？」
優子はこのチームメイトに対して、ほんの少しの隠し事もしたくないと思ったのである。
「優子ちゃん」
「はい」
「このタイミングでそれ聞く？」
「ごめん、ずっと誤魔化してたんだけど、やっぱ名前ぐらい聞いておきたくてさ」
暗闇の奥で、くすくすと笑い声がする。
「由里子」
「ああ、私と一文字違いか」
「そうね、じゃあ私そろそろ寝るね。おやすみ」
「ああ、おやすみ由里子」
それから間もなく、二人の寝息が聞こえてきた。外は静かである。
雨はすっかり止んだらしい。

不器用さ

優子は栃木に帰った。豪勢な朝食を御馳走になり、一家に手厚く見送られて、由里子の家を出たのである。壬生に着くと、激しい雷雨であった。栃木は雨が多い。しかも降ると必ず雷を伴う。

（東京では降ってなかったのにな）

優子は折りたたみ傘を由里子の家に忘れてきた事に気がついた。タクシーやバスも駅前からは出ていない。

（仕方ない。走るか）

そう思うが早いか、優子はスニーカーの踏みならして駆け出した。雨の街を、優子は一気に駆け抜ける。あっという間に優子はずぶ濡れになり、お気に入りのスニーカーも泥だらけになった。スニーカーの方は若干気にしているものの、自分が濡れている事は殆ど気にしていない。途中、水たまりの上を飛んだり跳ねたりする。雨の中、走ることを楽しんでいるようである。家に着いた頃には、優子はすっかり濡れ鼠であった。実家の寿司屋は、夕方からの開店なので、今は準備中である。優子は勢いよく表口の引き戸を開けた。

「ただいま」

父親が食いつかんばかりの表情で迎える。

「優子！昨日はどこに泊まってたんだい？それにそんなに濡れて、傘持ってかなかったのかい？」

「質問は一つにしてよ。昨日は友達の家。メールしたでしょ？傘持ってなかったから、走ってきた」

「友達の家って、東京に友達がいるのかい？」

「うん、知り合ったばっかりの子だけど」

「そうか。そりゃあ良かった。向こうにも友達が出来れば、仕事にも精が出るってもんだ」

「女に精が出るなんて言い方しないでよ」

「ん？」

「もういいや、着替えてくる」
優子は二階に上がった。雨に濡れた白いブラウスが透けて、下着の線がはっきりと見えている。そんな優子の背中を見て、父親は思う。
（優子も大人になったものだ）
この土日は何もする事がない。優子は学校、仕事がない日は家でゴロゴロしている。オンとオフの切り替えがはっきりしているのである。棚に並んでいる少女漫画を読みあさり、少しベースを弾いて、寝転がったままウサギと戯れたりしている。だが向上心の強い優子の事である。時折思い出したように部屋の隅でステップを踏んでみたりする。以前は廊下でステップを練習していたのだが、突然現れた兄にその姿を見られてしまい、恥ずかしくなった事がある。それ以来、そういう練習は部屋の中でするようになったのである。
外の雨はすっかり止んだようだ。にわか雨が上がると、空は打って変わって日が差し、蝉の鳴き声で辺りは一斉に賑わった。季節は夏である。
（外に出てみるか）
退屈をしていた優子は、Tシャツとハーフパンツ姿にサンダルを履き、外に出た。
（蒸し暑いな）
雨上がりのアスファルトの臭いが立ちこめている。辺りの草花に露が輝き、それが色鮮やかに揺れている。大きく伸びをして、優子は一人、見慣れた街を歩いた。優子は何もないこの街が好きである。母親と離れて暮らすようになって以来、優子はこの土地に育てられてきたと言っていい。故郷とは一見何もなくとも、本人に取ってみれば不思議な包容力を持つものらしい。そのためか、優子はこの土地にいる時には母親がいない孤独を感じずにいられた。もちろん、夢から離れた寂しさ、心許なさはある。けれども優子の夢とは、無数の光を飲み込んだ渦のようなもので、それに引き寄せられるにつれて、その危険さから身を翻して逃げたくなるようなものでもある。優子は夢を追う孤独の一方で、その危険さから守られている安心感

をもこの土地で感じているのである。

（昼飯でも食べにいくか）

優子は水たまりを飛び越えつつ、国道沿いの中華料理屋に向かった。国道沿いというのは寂しい風景である。日本中どこへ行っても代わり映えしない風景に、同じようなファミリーレストランが並んでいる。地方に大資本が進出して、こうした判で押したような風景を各所に作り出している。おまけにそれらは入れ替わりが激しく、見慣れたと思ったらすぐになくなり、また新しい店ができるのである。幼少の頃から変わらない故郷にあって、ここだけは時代の移り変わりを感じる。ここを通るたびに、優子は不変の価値とは何かを考えさせられるのである。

（私の夢も同じようなものかも知れない）

時代のあだ花。流行り廃りの世の中で、一瞬の華となり散ってゆく。それが夢であれば、夢とは何と儚いものか。実際にそのような運命を辿った人間は数知れない。自分だけは特別と、誰もが思っていたに違いないが、それでも時代は次の獲物を探しまわる。自分の夢とは幻影のようなものなのか。その霞を追いかけているような心細さと恐ろしさで、優子は立ち止まってしまった。国道を車がハイスピードで通り過ぎるたびに、優子の髪がなびく。遠くから蝉の声が聞こえる。

（それでも私には…。今の私に出来る事はこれしかないんだ）

昨夜、由里子に言った言葉を、優子は自分に言い聞かせていた。どれだけ未来が捕らえようのないものだとしても、今を生きる事でしかその尻尾は掴めないことは確かだ。

排気ガスを受けて煤だらけになった暖簾を潜ると、優子は中華料理屋に入った。店は昼時にも関わらず、客は一人もいない。それくらい寂れた店である。そこで昼食をとって満腹になると、優子の気持ちはすっかり前向きになっていた。我ながら単純な性格だと、優子は思う。ふと見ると、店の隅に置かれたテレビに、女性タレントの微笑む姿が映し出されている。雰囲気を壊さない、さりげないコ

メントをしつつ、たまにとぼけた事を言って笑いを取る。その間、常に笑顔を絶やさない。

（見事なもんだ）

そういう器用さを、優子は羨ましいと思う。優子は明るく活発な性格ではあったものの、集団の中での駆け引きにおいては決して器用な方ではない。普段は仲間とふざけ合っているが、仕事となると打って変わって無口な方であり、本当に話したい事以外は話さないような性格である。そうした潔さが普段は人から愛されるのだが、見せ物となるとそうもいかない。特にステージ上のフリートークなどでは、テレビの様に後で編集する訳にも行かないので、その場その場で瞬時に適切なコメントが求められる。実を言うとこれが優子にとっては苦手分野である。が、それでは優子の信念が許さない。できない仕事などあってはならないのである。優子はこれまでも得手不得手に関わらず仕事を受け、その後で人一倍努力をする事で自分の守備範囲を拡張してきた。優子の多彩な能力は天性のものではなく、こうした努力の賜物といっていい。であるから、やれば何とかなるさ、というのが新しい仕事に挑戦する時の優子の基本的なスタンスである。

（いつかステージでＭＣをやりたいな）

そんな事を考えているうちに、優子はふと思い出す。

（そう言えば、もうすぐ公演だ）

優子の所属するアイドルグループでは、定期的に公演が行われる。ステージ上では、日頃の努力の成果が如実に現れるのである。由里子も今頃それに向けて、練習をしているに違いない。

（こうしちゃいられない）

優子は立ち上がると、すぐに勘定を済ませ、外に出た。

（今年の夏は忙しくなりそうだ）

去年の夏、優子は浴衣を着て級友と夏祭りに出かけたりしていたが、今年はそんな暇もなさそうである。きっと浴衣は衣装で着る事になるだろう。優子の背中に日差しが照りつけ、うなじに熱を感じる。

（そういえば明日、合コンだとか言ってたな）
ふと優子は級友との会話を思い出し、青春を謳歌する級友達の姿を想像してみる。
（こっちの方が楽しいぜ）
道端の石を蹴飛ばし、優子は国道沿いを走り出した。

挫折で始まる夢

さて、ここでこの物語のもう一人の主人公を紹介しなければならない。哲平という若者である。若者と言っても、歳は優子より十も上である。哲平と優子の接点は殆どない。あるとすれば、哲平も栃木県出身で同郷であるというくらいで、直に会った事もなければ、話した事もない。哲平は元々優子と同じ様に夢を追う若者であった。闇夜に差す一筋の月明かりを信じて咲く月見草。この二人にはそんな表現が適当であった。ところがある時を境に、哲平は夢の存在を否定する様になる。それは単に夢から遠のいた者の負け惜しみであろうか。しかし哲平の抱いた疑問は畢竟、夢に近づく優子にも訪れる事となる。そんな哲平であれば、優子の苦悩とそれを蹴破った魅力を知る上で、この上ない語り手となってくれるだろう。

＊

哲平の父親が死んだのは、哲平が優子に出会う八年前、すなわち２０００年の事である。哲平は父親の死に目に会えなかった。その頃哲平は故郷の栃木を離れ、東京の国立音楽大学に通うため、一人暮らしをしていたのである。ちなみに「国立」と書いて「コクリツ」ではなく「クニタチ」と読む、私立大学である。哲平はここの演奏学科で、プロのピアニストになるべく、日々研鑽を積んでいた。ところが父親の死をきっかけに、家計は一気に苦しくなった。哲平の母親は元々病弱で働く事が出来なかったし、哲平は一人っ子であったから、援助をしてくれる兄弟もいなかったのである。そういった理由で、哲平は泣く泣くピアニストの夢を諦め、教員免許を取得し、東京にある中学の音楽教師になったのである。もっとも、哲平は元来家族思いの性格であったから、自分の夢を諦める事にそれほど抵抗はなかった。むしろ父親が死んだ悲しみと、母親を一人で守って

いかなくてはならないという覚悟の方が強かった。ところが、音楽教師を始めてから三年後、哲平はその職を辞する事になる。原因はというと、それが哲平自身にもよく分からないのである。

教師という職業は、哲平が当初予想していたものより遥かに辛いものであった。まず、やる気のある生徒にもない生徒にも、一様に同じ教育を施さねばならないということである。音楽の授業時間など、常に生徒達は騒がしく、とても授業と言えるものではなかった。これは他の教科であっても似たり寄ったりだっただろうが、殊に音楽などは受験科目ではないため、なおさら生徒達のモチベーションは下がるのであろう。哲平はこの騒がしさを度々注意した。どんなに大多数の生徒にやる気がなかろうが、それがやる気のある生徒の授業を聞く権利を奪ってはならないと考えたからである。

「やる気のない人は退出しても結構です」

とまで言った。その時は一瞬静かになるものの、ものの一分もしないうちに再び騒がしくなる。彼らには紳士的な言い方など効果がないのだろう。ただ哲平は温厚な性格で、大声で怒鳴りつけたりする事は得意ではないため、ついには名指しで生徒を注意するようになった。ある日の出来事である。いつものように授業が騒がしく、これでは授業にならないと判断した哲平は、騒がしさの中心にいると思われる生徒にこう言った。

「及川君、君はもう出ていってくれ」

するとその生徒は、生意気にもこんな事を言った。

「中島先生、中学は義務教育ですよね?教育を与える義務があるんです。それを放棄するんですか?」

哲平は落ち着いた様子で答えた。

「その通りだ。私には教育を与える義務がある。この教室にも私の授業を聞きたい人がいて、彼らにも教育を与える義務があるんだ。ところが君はそれを邪魔している。これは公務執行妨害と言っていい。君がやっている事は犯罪行為だ」

そう言われると、その生徒は何を思ったか、苦笑いをしながら教室

から出て行った。事態はこれで収まったかに思えたが、思わぬところで再燃する事となる。学期末試験が終了し、哲平は自分が受け持つクラスの生徒達と三者面談を行っていた。その中に、先ほどの生徒がいたのである。生徒とその母親は哲平と対座した。すると母親は開口一番でこう言った。

「中島先生、うちの子の今学期の評価は何ですか？」

哲平は多少面食らった。

「何ですか、とおっしゃいますと？」

「うちの子は学期末試験で全科目ほぼ満点を取っているんです。勿論音楽も同様です。そのため他の科目に関しては全て五を取っているんです。それなのに音楽だけが二じゃありませんか」

哲平は覚えていた。確かにこの及川という生徒は、ペーパーテストではほぼ満点に近い点数を取っていたのだ。しかし、哲平は普段の授業態度を考慮して、この生徒の通信表には二を付けたのである。

「確かに、及川君は試験の点数では良い点数でした。しかし音楽と言うものはペーパーテストだけで評価できるものではありません。普段の授業態度や、実技面も考慮して評価しているのです」

「では何のためにペーパーテストを行っているのですか」

「勿論、テストの点数も考慮に入れて評価をしていますよ。本来なら及川君の授業態度は一の評価が妥当ですが、まあ試験前には一生懸命勉強をしたのだと言うことで二の評価になったわけです」

「一！うちの子の授業態度はそこまで悪いんですか？」

「ええ、それはもう相当なものですよ。私もほとほと困り果てているので、親御さんからも是非言い聞かせていただきたい」

「しかし、私はこの子から聞きましたが、先生はうちの子を犯罪者呼ばわりしたそうじゃありませんか。授業中に少し騒いでいたくらいで犯罪者扱いされたら、授業を受ける気がしなくなるのも当然じゃありませんか？」

「犯罪者？ああ、私は授業を妨害する事は公務執行妨害だと言ったんですよ。それにそもそも授業態度が悪いから注意したのであって、

それが原因で授業を受ける気がしなくなったというのは原因と結果が逆です」

「公務執行妨害！馬鹿げてる！大体、高校入試には中学の時の内申点も大きく加算されるんです。音楽などで足を引っ張られる訳にはいかないんです」

及川の母親は段々と口調が荒くなってくる。だが哲平という男は口論では負けた事がない。というより物事を理詰めで考えないと気が済まない性格なのである。

「そう思うなら音楽の授業も真面目に受けていただきたい。音楽などと仰いましたが、それだけ音楽も重要だと言う事です」

哲平がそう言うと、母親はついに感情を露にした。

「馬鹿にしてるわ！勉強で優秀な生徒の能力が、たかが音楽ごときでスポイルされてしまうなんておかしいわ！義務教育に音楽なんて必要ないのよ！」

「それはそもそも内申点制度の問題であってですね…」

哲平が言い終わらないうちに、母親は息子を連れて教室を出て行ってしまった。

（及川も大変な母親を持ったものだなあ）

今になって哲平は及川に同情していた。しかし、あの母親の音楽を軽視する態度は全く哲平には理解できなかった。哲平は元々音楽に救われてきた人間である。幼少の頃から勉強やスポーツなどは全く出来なかったが、音楽だけは人一倍出来た。小さい頃からピアノを習っており、中学、高校と勉強はそっちのけでピアノばかりをやっていた。それで大学を卒業し、職に就けている訳だから、何も不自由を感じる事はなかった。そういう哲平にしてみれば、勉強で頑張りたい者は勉強で、音楽をやりたい者は音楽で勝負すれば良いという事なのである。それが何故、日本の教育現場では皆が一様に「勉強も、スポーツも、音楽も」となってしまうのであろうか。その理由が哲平にははっきりと分かっていた。

（内申点制度と言うものの弊害だろうな）

普通高校に入学する生徒の場合、学問を志して入学を希望している訳だから、内申点を考慮するにしても主要五科目の成績のみで評価をすれば良いはずである。が、そこに何故だか知らないが音楽だの体育だのといった関係のない科目の内申点まで加味されるのである。結果及川のように学問は優秀なのに、興味のない音楽で足を引っ張られてしまう生徒が現れるのである。もし内申点などなければ、及川は最初から音楽の授業など受けないであろう。哲平はそれで良いと思っている。興味のある人間だけが授業を受ける事によって、授業の質も高まるし、生徒も得意分野だけを伸ばす事ができる。これほど効率の良い教育はない。それを内申点制度が阻害している、と言う訳である。そう言った意味で言えば、及川もその母親も内申点制度の被害者である。だが及川の母親の矛先は内申点制度ではなく音楽そのものに向かっていた。それは断じて違う、と哲平は思うのである。

（もっとも、大多数の生徒から見れば、音楽の授業など足手まといでしかないのかもな）

ともかくも、哲平はこうした教育制度の矛盾と、それによって生じた音楽教師と言う職業の存在意義のなさを感じていたのである。もっとも、これは哲平が音楽教師を辞めた直接の原因ではない。

直接の原因と言えるかどうかは分からないが、一番の理由を挙げるとしたら、それは哲平の夢の存在だろう。かつて抱いていたピアニストの夢である。その夢を手放した当初はそれほど気にもならなかったが、音楽教師を続けているうち、その夢の存在が日増しに膨らみ続けたのである。

思えば、夢とは不思議なもので、それ単体では大した重みを持たない。それが冴えない現実との対比や夢とは違う道を選んだ場合の未練によって一層の輝きを帯びてくるのである。夢には本来、実体がない。それが「そうでなかった場合」の実体を目の当たりにする事によって、あたかも実体を得たかのように燦然と光を放って見えるのである。夢が単なる「将来の希望」であれば、それは十人十色

で、人によって様々な形があっていいはずだが、前述のように夢とは比較対象があって初めて認識される側面がある。夢が往々にして職業と結びつけられて考えられるのはそのためであろう。「職業に貴賤なし」とは言うものの、夢を追う人にその言葉は届かない。その場合の夢とは他の対象物と比較して選出した夢だからである。

そういった意味で、哲平はその「比較対象物としての夢」を抱き、それを音楽教師という実体と比較する事によって輝かせてしまったのである。哲平にそういう自覚があったかどうかは分からないが、音楽教師を続けるに連れて夢の存在が膨らんでいく事を確かに哲平は感じたのである。

それが辞職の一番の原因である。と言えばそうかも知れないが、それだけで職を退くに至った訳ではない。第一、辞職したところで、ピアニストになる術など哲平には全くなかったのである。そのような理由で辞職したというのは、論理的思考の持ち主である哲平の場合考えにくい。

では何故辞職したのか。それが哲平にはいくら考えても分からないのである。ただ、「自分は如何に生きるべきか」という命題を哲平が抱えていた事は確かである。

（俺の居場所はここではない）

理由は分からないが、そのような直感めいた感情に突き動かされて、哲平は辞職を決意したのである。

退職後

そのような過程を経て、哲平は栃木の実家に戻った。久しぶりの実家である。哲平は今や無職であり、日がな一日何をする訳でもなく寛いだ。だがそんな哲平の姿を心配そうに見つめる者がいた。哲平の母親である。哲平が辞職した事で、この家の収入はついに途絶えた。哲平とその母親は、哲平の父親が遺した遺産を切り崩して生活をしていたのである。母親の心配も当然であろう。

ある日事である。母親はついにその不安を口にした。

「哲平、お前いつまでそうやってゴロゴロしてる気？そんなに暇なら仕事探しでもしたらどう？」

「ああ、そのうちな」

「そのうちって、お前いっつもそんな事言って、教師辞めてから一ヶ月にもなるじゃないの。大体、辞める時だって親にも相談せずに辞めちまってさ」

哲平は教師を辞める際、母親には一切相談しなかった。辞める理由を説明する自信がなかったし、第一反対される事が目に見えていたからである。

「俺はね、母さん。別に毎日ただゴロゴロしている訳じゃないんだよ。自分の生きる道を考えているんだ。そりゃ人間金がなきゃ生きていけないから、それが経済活動に根ざした道である事は必須だよ。だけどそれ以前に自分の生きる道を決めて、その上でどうそれを経済活動に乗せるかを考えるのが順序ってもんだろ。人間は生きるために働くんだ。働くために生きるんじゃない。だから生きる意味をまず考えてるんだ」

「そりゃ結構だけどね。その生きる道とやらを働きながら考えたって遅くはないだろう？別に就職しろとは言わない。アルバイトだって良いんだ。とにかく働く姿勢を見せてくれよ。お母さんはね、お前が一日ブラブラしているのを見ているのが辛いんだよ。ご近所さ

んにもみっともないし」
哲平は腹が立った。何故無条件に働く事を美徳と考えるのだろう。近所に合わせる顔がないから働くのか？そんな理由で人の一生を決める気か？と、哲平は思うのである。
「みっともないとは何だ。そんなに働いて欲しいなら、それは母さんの都合だ。母さんが職を探して、俺を無理矢理働かせると良い。俺はここを一歩も動かんからな」
そう言うと哲平は、その場にごろんと横になり、目をつむった。
「この馬鹿息子が！」
そう言うと、母親は足を踏み鳴らしてどこかへ行ってしまった。
（とは言うものの）
哲平は母親の背中を横目で見ながら思った。
（いつまでもこうしている訳には行かないだろうな）
哲平は起き上がって、庭に生い茂る草木をぼんやりと見つめた。
（第一生きる道を考えようにも、手がかりがない。世間を知らない事には、自分の生きる道どころか、自分自身すらも分からない）
今更ピアニストの夢を想っても仕方がない。だが自分はピアノしかやってこなかった。他には何も出来ない。つまり自分がやってきた事の延長線上で、何か自分に出来る事はないか。それを哲平は考えていた。この「自分に何が出来るか」という問いこそ、哲平の思う「自分自身」を探る糸口であろう。出来る事が見つかれば、道も自ずと決まってくるのである。ただし言わずもがな、自分に何が出来るか、と言う事はやってみなければわからない。つまりこうしてじっと考え込んでいても、何一つ答えが出てこないであろう事を、哲平は気付いていたのである。そして気付いていながらも、最初の一歩を踏み出す勇気が、哲平にはなかった。一度の失敗で懲りてしまい、臆病になっていたのであろう。
そんな矢先に、思ってもいなかった話が飛び込んでくる。哲平がいつもの様に気ままに過ごしていると、母親がやって来てこう言った。

「哲平、感謝しなさい。お母さんあんたの働き口見つけてやったから」

「え」

哲平は狐につままれた様な顔で母親を見上げた。確かに哲平は母親に、職を探してくれれば良い、と言ったが、まさか本当に探してくるとは思わなかった。哲平の母親は病弱なくせに行動的な性格で、哲平が思索に耽っているうちに、いつも先回りして行動してしまう。例えば学生時代、哲平が音楽教師になるつもりだと母親に伝えたところ、翌朝の食卓に記入済みの履歴書が置かれていたことがある。また東京で一人暮らしを始めた時には、「布団がないから買いにいこうと思っている」と何気なく母親に電話で話すと、その二日後に母親から布団が届き、結局自分が買って来た分と合わせて二枚重ねで寝る羽目になった事もある。哲平はそういう母親をありがたくも思ったが、その反面おせっかいで過保護な親だとうんざりしていた事も事実である。そのためこの時も、哲平は嫌な予感がしていた。（どんな仕事を見つけて来たのやら。つまらん仕事なら断ってやる）だが存外、母親が見つけて来た仕事は、哲平のどんな論理を以てしても否定し難い、パズルのピースがぴったりとはまる様な仕事であった。

「乃木さんのところで、ピアノの教師を探してたのよ」

乃木さんとは、哲平のご近所さんである。昔から哲平の一家とは懇意にしている。昔はオーケストラの指揮者だったが、還暦を過ぎ、退職してからは自宅でピアノ教室を開いていたのであった。

「あんたピアノは弾けるんだし、丁度いいじゃない」

確かに、哲平の持つ唯一の専門性はピアノだけである。それを活かして仕事をする事に異論はない。異論がないどころか、中学の教師と違って、学ぶ気のある生徒だけを教える事が出来、煩わしい進路相談などに悩まされる事もない。考えてみれば、これほど理想的な職場はない様に哲平には思えた。といっても、人生の岐路に立たされている哲平である。そう易々と了解するはずもない。

「まあ、考えておくよ。少し時間をくれ」
「考えてたって答えなんか出ないよ。一度挨拶がてら見学に言ってみたら良いじゃないか」
母親はあくまで理屈より行動に拘る。
「それはそうだけどな、一度挨拶に言った手前、やっぱり辞めます、とは言いづらいじゃないか」
「あんたね、乃木さんとは昔からの古い付き合いじゃないか。ちゃんと事情を話して、とりあえず見学だけさせてもらえば何も誤解なんて生まないよ」
事情を話すとは何を話せば良いのか。自分の生きる道を考えているから、まだ自分が何をすべきか分かりません、等と言うのだろうか。
哲平の疑問をよそに、母親は続ける。
「お母さんも一緒に行ってやるから、安心しな」
どこまでお節介をやくのだろうか。と、哲平は
「いいよ。一人で行く」
と、つい勢いで行くと言ってしまった。こうして哲平は乃木のピアノ教室に行く事になったのである。

乃木との再会

乃木の自宅兼ピアノ教室は、哲平の家から自転車で十分程度の、ごく近所にあった。そこへ向かうとき、哲平は少なからず緊張をしていた。乃木とは面識はあるものの、会うのは久しぶりであったし、それ以上に雇われる立場で顔を合わせるのは、単なる知人として会うのとは違う。

春の心地よい風を受けながら自転車で、哲平は乃木の自宅へ向かった。流れ行く春の匂いに身を任せていると、何故だか緊張が少し和らいだ。

乃木邸に着くと、昔と変わらない鼠色の洋風家屋があった。ガレージには白いセダンが止まっており、表には「乃木ピアノ教室」と書いたピアノの形を象った小さな看板が立っていた。

（久しぶりだな）

昔、哲平が小学生の頃に遊びに来て、それ以来である。哲平は今二十六歳であるから、十四、五年ぶりであろう。哲平は玄関のチャイムを恐る恐る鳴らした。暫しの沈黙の後、外付けのスピーカーから初老の男性の声が聞こえた。

「はい」

聞いた瞬間、それは乃木の声だと、哲平にははっきりと分かった。とても懐かしい、暖かい、忘れる事の出来ない声である。

「あ、こんにちは。中島ですけれども。ピアノ教室の見学をさせて頂きたいと思いまして」

「ああ、じゃあ裏口の方から入って」

家の裏手を見ると、砂利道に点々と飛び石が敷いてあって、質素な白いドアに繋がっている。哲平はそのドアから中に入った。

「失礼します」

中に入ると、そこには誰もいなかった。そこはピアノ教室として使っている部屋だろう。天井の高い防音室には二台のグランドピアノ

が置かれ、窓際には背の高い譜面台と、その上には白く尖った指揮棒が置かれていた。哲平は玄関で靴を脱ぐと、中に入って辺りを見回した。床が硬い。防音のため、床にコンクリートを詰めているのだろう。カーテンから漏れる日の光がピアノにあたり、黒く光っている。黒革の椅子に座ると、哲平は昔ここに来た時の事を思い出した。この部屋の匂いから、ありありと昔の記憶が蘇ったのである。思えば哲平が小学生の時のことである。当時既にピアノを習っていた哲平は、この部屋で乃木に自分の演奏を聴かせた。その時の事を、哲平は今はっきりと思い出せる。そこで哲平はブルグミュラーのアラベスクを弾いた。覚束ない演奏ではあったが、乃木はそれを誉めてくれた。弾き終わると、乃木が拍手をしながらこう言った。

「哲平君、とても上手だったよ。君は将来、立派なピアニストになれるよ」

勿論、今となってはその言葉がお世辞であろう事は哲平にも分かるのだが、当時の哲平はその言葉を信用した。何においても誉められた事のなかった哲平である。よほど嬉しかったに違いない。それからというもの、その言葉を常に念頭に置き、哲平はピアノの練習に明け暮れた。結果、ピアニストにはなれなかったが、今の自分があるのはその乃木の一言のお陰だったかも知れない。と、哲平は考えた。もっとも今の自分が果たして進むべき道を正しく進んで来た結果であるのか、哲平には自信がなかったが、少なくとも自分の才能に気が付き、それに全神経を集中させる様な充実した半生を送る事が出来たのは確かである。それ故に、誉められる事ほど人の一生を左右するものはない。と、哲平は痛感していた。そして同時に自分の来し方と現在の姿を比較して、今の自分を哀れにも思った。

と、部屋の奥の茶色のドアから、初老の男性が現れた。それは大分老け込んではいるものの、紛れもなく乃木であった。白髪をオールバックにし、銀縁の眼鏡をかけ、口髭を蓄えている。ワイシャツの上に紺のベストという何とも品のいい出で立ちであった。

「やあ、久しぶりだね、哲平君」

乃木は開口一番、左手を上げてこう言った。慌てて哲平は立ち上がり、深々と頭を下げた。
「お久しぶりです。この度は母が勝手なお願いを致しまして…」
「いや、良いんだよ。大分悩んでいるそうじゃないか。何でも自分の生きる道を模索してるとか」
（そんな事まで聞いているのか）
どうやら母親はそこまで話しているらしい。哲平はとたんに恥ずかしくなった。ご近所馴染みだから、気を許して話をしたのであろう。
哲平は仕方なく首を縦に振った。
「そこまでご存知でしたか。何とも表現しづらい悩みなんですが、ふっと湧いて来て、音楽教師を辞めてしまいました」
乃木は椅子に腰掛け、哲平にも座るように勧めた。座りながら足を組むと、乃木は言った。
「いや、分かるよ。痛いほどね。私も若い頃はそういう悩みがあったもんだ」
これが哲平には意外であった。乃木はピアノ教室を開く前、オーケストラの指揮者として名を馳せていた人物だ。夢に向かって一直線に進んで来たのではないのか。その乃木に、夢と現実の狭間を彷徨う悩みがあったのだろうか。と、哲平には全く解せなかった。
「これからレッスンがあるから、見ていくと良い。それでやれるかどうか、君が判断してくれ」
「はい、ありがとうございます」
哲平は部屋の隅にある椅子に腰掛け、レッスンが始まるのを待った。部屋の本棚には、シューベルトやベートーベンの伝記、それにドラえもんなどの漫画本が並んでいた。恐らくレッスンを受ける子供が、空いた時間に読むのであろう。
（割と小さい子が来るのかな）
哲平はそう察した。
それから五分ほど経った頃である。部屋に一人の女の子が入って来た。小学校高学年くらいであろうか。哲平が想像した通り、年少

であった。
「こんにちは、乃木先生」
女の子は礼儀正しく挨拶をした。
「こんにちは、ゆかりちゃん。暑い中大変だったね」
「ほんと、今日は暑かったよ。あれ、今日はお客さんがいるの？」
「ああ、今日はあのお兄さんが見学に来てるんだ。まあ、気にせずにいつも通りやろう」
女の子は哲平の方を向くと、軽く会釈をした。
「こんにちは」
哲平は女の子に笑顔で挨拶をした。元来、哲平は子供が好きである。中学の教師になったのもそういう自身の性格を知っての選択であったが、中学生とは哲平が想像していたよりも複雑な年頃であったらしい。何かと自己主張が強いくせに、それでいて特に何も考えていないから、その真意を量りかねる。大人にしてみれば、これほど扱いに困る存在もない。そういう青春の闇を背負った様なところが、この女の子にはなかった。つまりまだ子供だったという事だ。
その後、レッスンが始まった。女の子はカノンから始まり、ツェルニーやソナタといった練習曲を弾いており、乃木のアドバイスを受けながら、繰り返し同じ曲を練習している。その姿を見ているうち、哲平は何か微笑ましい気持ちで心が満たされるのを感じていた。まだ幼かった頃の自分を思い出し、目の前の女の子と重ねてみていたのである。哲平は自分の幼少期を思い出すたび、ある感慨に浸される。実は哲平は幼少期、ピアノが何よりも嫌いだったのである。元々哲平はピアノの練習が嫌で、一日でも早く辞めてしまいたいと思いながらも、それを言い出せずにずるずると続けていた。それが乃木に誉められた事により、唯一の自分の長所として認識する様になり、いつしかピアニストを目指すまでになっていた。そういう運命のいたずらとでも言うべき偶然の積み重ねで人生が方向付けられている事に、哲平はある種の寂寥感を感じざるを得ない。
（人の夢なんていうものは必然ではなく偶然に作られていくものな

んだな）

もっとも、そんな人生の浮薄さを、哲平は微笑ましくも感じている。夢などと言うおおよそ偶然の積み重ねで出来た何の因果もないものを、人は命を懸けて追いかけ続けているのである。これほどに滑稽な話もない。

（人の一生と言うのは大いなる笑い話に過ぎないのかも知れない）

そう思うと、哲平の「自分は如何に生きるべきか」という悩みは幾分か薄れていくのである。

レッスンが終わったようである。女の子は礼儀正しく乃木にお辞儀をする。

「ありがとうございました」

それに乃木は笑顔で答える。

「ああ、お疲れ様。今日もよく頑張ったね」

女の子は手早く楽譜をバッグに放り込むと、玄関で靴を履く。

「先生、さようなら」

「さようなら、また来週」

女の子が部屋から出て行き、バタンと扉が閉まる。

「さて、どうだったね？見た感想は」

乃木が哲平の方を振り返り訊ねた。哲平は先ほどの感慨に打たれた直後だからか、この機会を運命と感じた。恐らく、どうせ人生など偶然に決まってしまうのだし、ここで躊躇していたって自分にはする事もないと考えたのであろう。

「やらせてください」

哲平は即答した。自分の人生が少しずつ拓けていくのを、この時哲平は感じていた。

「そうか。それはかまわんがね」

乃木は踵を返し、背中でこう言った。

「うちの給料は安いぞ」

哲平は即座に答えた。

「いえ、いいんです。何もしないでいるより、少しでも前に進みた

いんです」
哲平がそう言うと、乃木はテーブルの上からタバコを掴んで、哲平に言った。
「表で一服せんかね」
庭のテラスで乃木と哲平の二人はタバコを吸った。初夏の草花が鮮やかに揺れて美しい庭である。
「哲平君、君は悩んでいると言ったね」
乃木がタバコに火を付けながら、唐突に切り出した。
「ええ、悩んでいます」
とだけ哲平は答えた。
「君の悩みが私にはよく分かる」
「はあ、そうですか」
哲平は吐き出す煙を止めた。
「ああ、人の人たる所以は、自分の道をゆく事にあるのだ」
哲平は密かに感激した。まさかこの言葉にならない自分の思いを、分かってくれる人間がいるなどと、予想だにしていなかったのだ。
「だが」
乃木は続ける。
「それが夢となると話は別だ」
乃木はタバコの煙を吐き出してこう言った。
「人の一生はしばしば、旅に例えられる。それになぞらえて言えば、夢など車窓から見る景色に過ぎない。その華やかさに惹かれて見る幻想に過ぎん。思えばこれほどに自分の道を踏み外す要因となるものはない。それは決して目的地ではあり得ないからだ」
何と厳しい言葉であろう。乃木は自分の道をゆけと言う。しかしそれでいて夢の存在を全否定したのである。では自分はどうすれば良いのか、哲平は途方に暮れた。
「しかし、そういう悩みを一向に持たず、何不自由なく、それでいて死んだ様に暮らしている人間が多い中で、君はたいしたものだ」
乃木はそう言うと、タバコを灰皿にねじ伏せた。

「まあ、よく考え、悩む事が大事だ。その間は、ずっとここにいると良い」
「しかし」
哲平は反論した。
「乃木さんは、指揮者として大成されたではないですか。それは夢を叶えられたという事ではないですか？」
乃木はそれを聞いてふと、自嘲気味に笑った。
「よしんば夢に辿り着く事が出来ても、それは遠くから見るのとは全く違う。ごつごつした岩肌や、蚊やブヨのたかる草木が生い茂っているだけだ。そこは自分の夢見た場所ではなかったと、辿り着いて初めて気が付くのだ。そのような一生が幸福とは思えない」
「しかし、それは夢を叶えた者だけがたどり着ける境地です。それを見る事すら出来なかった者よりは幸福なのではないですか？」
負けじと哲平は反駁した。そこには幾ばくか、夢に向かって進んで来た自分の半生を否定できない意地があったのである。そんな哲平に乃木は悠然と答えた。
「やはり、君はたいしたものだよ。夢を叶えられそうもない時、大抵の人間は夢の価値を否定しようとする。また他人にそういう言葉を期待する。自分の価値観を覆そうとするのだ。だが君はそれをしなかった。だがね、君の様な人間こそ夢の残酷さに気付くべきだ」
乃木はタバコとライターをポケットにしまうとこう言った。
「夢にたどり着き、その真の姿を知った後、果たしてどう生きる？価値観を簡単には覆せない強固な精神を持った者ほど、それが見出せんのだよ」
哲平は絶望した。夢にたどり着く事は出来ないにせよ、それに向かって邁進する事が自分の道を行く事であるという考え方に変わりはなかったのである。しかし哲平はそれすらも否定された。では自分の道を行くとは一体何を意味しているのか、哲平は考えなければならなかった。それは今までの哲平の価値観を一切否定し、一からそれを再構築しなければならない事を意味していた。しかし、それは

哲平にとって希望でもあった。目の前に垂れ下がっていた帳が落ちた様に、前途が洋々と広がったのである。ただその空漠とした広さと静かさに、哲平は言い知れぬ恐怖を味わった。どうやら絶望と希望は表裏一体のものであるらしい。

街角の憂鬱

哲平は主に平日のレッスンを任された。レッスンの時間帯は曜日によって違ったが、大抵は午後二時頃から七時頃までの時間帯であった。レッスンに通う生徒は主に小中学生であり、大方大人しい子ばかりであった。勿論、皆が皆意欲的にピアノを習いに来ているという訳ではなかったが、哲平はかつてやる気のない生徒であったため、そういう生徒を見ていると幼少の頃の自分を見るようで微笑ましかった。そういうときは生徒の側に合わせたペースで、彼らに無理のない様にレッスンをするのである。金を払ってレッスンを受けに来ている訳だから、何もこちらの要求を押し付ける必要もなく、それで他の誰かに迷惑がかかる訳でもない。何よりそれで本人のモチベーションが持続するのであれば、それが一番良いではないか。というのが哲平の持論であった。義務教育という不特定多数を相手にした教育ではおおよそ実現できなかった教育方針である。そういった意味では、中学の音楽教師よりもこちらの方が哲平にとって納得のいく仕事ではあった。といって毎日が充実しているかと言えばそうでもない。哲平の毎日は空虚そのもので、心はどこにあるのか知れず、時には仕事にすら身が入らないときもあった。

（自分の道とは一体何なのか）

この問いが哲平の中で這い回り、平穏な日常を剥ぎ取って哲平を孤独に陥れるのである。

父親が死んだ時、哲平は改めて「人はいつか死ぬ」という事実に気付かされた。それからというもの、哲平は時間の流れが恨めしかった。刻々と迫る死に向かって背中を押される恐怖。それがいつしか自分の道を思い詰める結果となったに違いない。人生は一度しかないという事実が、この上ない重みとなって哲平にのしかかったのである。

休日、哲平は何をするでもなく街を歩き回った。迷いや不安から

逃れる事は出来ないものの、家にいると何となく居たたまれない気分になり、街を徘徊してしまうのである。そういう時、大抵は宇都宮の街を歩くのだが、この街を歩いていると、改めて自分の夢の軟弱さに気付かされるのである。

（宇都宮とは寂しい街だな）

と、歩くたびに哲平は思う。それなりに街は栄えている。しかし街独自の魅力は全く見当たらないのである。駅前に現れては消えていく大型商業施設、飲食店などは大方東京から進出してくるものであろうし、駅舎やペデストリアンデッキは仙台駅か大宮駅の模倣であろう。要するに、どこを見ても華やかな他の都市の受け売りに過ぎないのである。

（俺の夢とはこのようなものかも知れない）

他者の華やかさに目を奪われ、その成功モデルを真似して、自身も輝こうとする。自分の夢とはそういうこの街の寂しさにどこか共通していないかと思うのである。

思えば、「町おこし」という言葉ほど憂鬱な言葉はない。町民が我が町の魅力のなさを自覚し、嘆き、他の地域の成功事例や都市の美点を懸命に真似てみるも、大概は努力の甲斐なく失敗に終わるのである。例え成功したかに見えても、殆どごく一時のものに終わる事が多い。町民達が一致団結してかけ声をあげるも、それに対して周囲は冷ややかな視線を送り、時折失笑すら漏れる始末である。結果として町民達は改めてわが町のポテンシャルのなさを思い知り、恨み、深く落胆するのである。正に夢というものの儚さを象徴しているかのようである。そんな中、哲平は思う。

（誰かの模倣では駄目なのだろうか）

確かに、夢とは誰かの模倣でしかないかも知れない。模倣で身につけた価値など、殆ど存在価値はない。他人の方法だけを真似ても、大元を超える事は出来ないであろう。しかしそれでは「自分の道を行く」とは一体何であるのか。前代未聞かつ唯一無二の事に挑戦する事は簡単である。アメリカの馬鹿げたコンテストにある様に、頭

突きでスイカをいくつも割ったり、顔に洗濯バサミを大量にくっつけたりといった事に挑戦する事は何かしら出来るであろう。しかしそのような無意味な事に人生を費やしたくはない。出来る事なら人の役に立ち、尊敬されたいものである。だがその手段は一つとして見当たらないのである。自分の能力の範囲内で世の中に貢献し、かつ自分にしか出来ないことなど、何もないに決まっている。第一自分の唯一の取り柄であるピアノにしたって、自分より上手い者など世の中には五万といるのだ。つまり自分がいなくても世の中は問題なく回るのではないか。自分は不必要な存在ではないか。と、哲平は喫茶店で、街頭で、自宅で、仕事場でこのような事を延々と繰り返し思索していたのである。そうして街のあちこちで吐き出すタバコの煙の味ほど憂鬱なものはなかった。そしてその内に、ある結論に辿り着く。

（世の中の殆どの人間は、必要のない存在なのではないか）

勿論、自分も含めてである。世の中に果たしてこれほどの数の人間が必要であろうか、と思うのである。世の中の殆どの人間はしたくもない仕事をして、毎日糊口を凌いでいる。そうしなければ生きられないからである。そうして税金を納め、子供を作ることで何とか自らの存在意義を保とうとしている。考えてみれば、何と残酷な話であろうか。自分に存在意義のない事を自覚しながら、それでも「社会に貢献しているから」「妻子がいるから」と言って懸命にそれを否定しつつ、長い人生を歩まねばならないのである。しかもそれが俗に「普通に生きる」とされている生き方なのである。哲平には、そういう所謂「普通の人」の心理が全く理解できなかった。自分の存在意義がないと分かった時点で、死んでしまえば良いではないか。と思うのである。恐らく哲平の論理性がそう考えさせるのであろう。あまりにも偏った考えである事は哲平も自覚している。しかしこの考えを論理的に否定出来る者があろうか。と哲平はこの命題の真実性を感じて止まなかった。

要するに、夢を追う者、それを叶えた者、そうはせずに普通に生

きている者。誰一人として存在意義はない。存在意義のある者とは、すなわち自分の道を行く者とは一体何であるのか。哲平は頭を悩ませた。また、夢が模倣に過ぎないと知った以上、哲平はもはや才能、運という言葉にも価値を見出せなかった。

（俺に足りないのは才能でも運でもない）

才能を持った人間など掃いて捨てるほどいる。その中で己の才能に気が付くことができ、努力を継続できる環境に恵まれ、世の評価を得られる運こそがむしろ重要なのである。しかし才能はあっても運に恵まれない人間が多数派であるから、夢を追う事は大抵失敗に終わる。ところが、一方で運に恵まれ才能を夢にまで昇華させる事が出来たとしても、それはあくまで運の功であるから、不運によって容易く没落する。いずれにしても悲劇である。それを思えば、才能や一時の運ほど有害なものはない。夢とはかくも脆く、無意味なものであった。

（では何を目指せば良いのだ？何を手に入れれば良いのだ？）

哲平には自分の道を行くために求めるべきものすら分からない。どうすれば心の隙間を埋められるのか、虚無感から逃れられるのか、そんな思いを巡らせ、思考回路が摩擦を起こし、ついに発狂寸前にまで追い込まれた。

そんな時に、哲平は橋の欄干から、宇都宮駅前に流れる田川を眺めた。夕日に紅く染まる水面を見ていると、ふと不変の価値というものに気付いた。それはただそこにある事である。何も考えず、何の欲も持たず、「無」としてあり続ける事である。そこに何の迷いもない、何の希望も絶望もない。その果てしない自然の強さに、哲平は惹かれた。これほど今の自分を肯定してくれるものがあろうか。夢も希望も、自然の強さの前では無力である。

（自分は「無」になりたい）

哲平はそんな事を考えていた。

母親

ある夜、ついに哲平は、乃木に思いを打ち明けた。レッスンが終わった後、いつもの様に乃木の自宅のテラスでタバコを吸いながら、話をしたのである。夜風が様々な虫の鳴き声を連れてきて、辺りは無音よりも静寂であった。

「自分の道とは何でしょうかね？」

もはやこんな哲学的な問いを恥ずかしげも無く繰り出せる程に、哲平は乃木に慣れ親しんでいた。だがその思い詰めた表情には、もはや生きる事に悩み疲れた、青く沈んだ面影があった。

「そうやって悩む事だ。悩みながら生きる事だよ」

あっさりと乃木は言う。

「しかし、僕は悩む事に疲れました。僕は実のところ無になりたいのです。何も考えず、悩まずに生きていく事が出来れば、どれだけ強い事でしょうか」

哲平がそういうと、乃木はゆっくりと諭した。

「無になる事はとても難しい事だ。禅を組む事で無の境地を目指す人もいるがね、そんなものは虚構に過ぎない。人間が生きていく上で無になどなれるはずがない。そもそも無になりたいと考えている時点で無ではないのだから」

静かに、ただ確実に、哲平は無になる事すら否定された。言葉は何にも増して残酷なものである。絶望感に満たされ、哲平は答えた。

「では何を求めれば良いのでしょうか？何に向かって生きれば良いのでしょうか？」

「何も求めなくていい。ただ自分の道を行けとしか言いようがない。ただ」

絶句する哲平に乃木はこう続けた。

「今の自分を否定する必要はない。むしろ今の自分を肯定して、内なる声に耳を傾けることだ。そうすれば成すべき事も分かってくる

さ」

恐らく、乃木の言わんとする事は、「夢」を筆頭とした外部の対象物に向かって進むより、自己の内部にある純粋な欲求に従って生きよ、と言う事であろう。確かに、夢に向かって邁進し、それをやっとの思いで掴んだはいいが、気が付いてみると本来の幸福からほど遠いところにいた、という例は枚挙に暇がない。それは哲平もよく理解していた。だが内なる声、と言われても、哲平には今ひとつそれに当たるものが見出せなかった。

（食欲、性欲、睡眠欲というような原始的な欲求以外に、何か純粋な欲求が俺の中にあるだろうか）

哲平は元来、自分の欲求には正直な方であるから、そうした欲求を我慢した覚えが殆どない。振り返ってみれば、教師を辞めた時にしても、何か得体の知れない欲求に突き動かされていたのを覚えている。つまりそれだけ哲平は自分の欲求に従って生きてきたのであるが、その自分でも未だ叶えていない秘めた欲求があるのだろうか、と哲平は思うのである。

二人が話しているうちに、乃木の奥さんが家の窓を開けて声をかけた。室内の明かりが薄暗いテラスに差し込む。

「二人とも、お話中悪いんだけど、お夕飯出来たわよ。哲平君も良かったら食べていく？」

哲平が乃木の奥さんから夕飯を誘われる事は、これまでも間々あった。そういう時、哲平は遠慮なく誘いに乗る。自宅でも母親が食事を作っているのだが、哲平は自分の母親よりも、この乃木夫妻の方が話しやすかったのである。自分の悩みを分かってくれている、そんな安心感があったからであろう。

「すみません、ではお言葉に甘えて」

哲平は易々と誘いに応じると、室内に入っていった。

オレンジ色の照明の下、乃木夫妻と哲平は円卓を囲む。他人が見たら家族の団欒にしか見えないであろう。食事中、乃木の奥さんが哲平に言った。

「哲平君、レッスンの方はどう？」
「ええ、順調ですよ。中学の教師よりも向いているみたいです」
「そう、それは良かったわ。うちの人の病気も早くよくなると良いんだけど。暫くは哲平君に負担をかけそうだわ」
実のところ、乃木が哲平を雇ったのは、自身の病気が原因である。精神疾患、所謂「鬱病」である。何が原因でそうなったのか、哲平には分からなかったが、哲平の悩みを見透かした様に言い当てるところを見ると、大方哲平と同じ様な悩みを過去に持っていたのかも知れない。ともかく、そういった病気のせいで、乃木はレッスンを続ける事が出来なくなり、哲平を雇ってピアノ教室を存続させたのである。
「負担だなんてとんでもない。とても楽しくやっています。第一私はこの仕事がなければ生きていけませんよ」
事実、経済的にも精神的にも、この仕事をしていなければ、哲平は今頃どうなっていたか分からない。乃木は殆ど会話を交わす事がないのだが、その口を重々しく開く度、こんな事を言った。
「哲平君、今日と言う日はもう残り少ない。人生もこのように有限だから、周りに流されて妥協してはいかんよ」
また、乃木がそんなことを言う度、乃木の奥さんは
「また、最近すっかり説教臭くなって、もう歳だわね。哲平君、聞き流してちょうだいね」
などと乃木をたしなめる。
「いいえ、乃木さんの言葉に、私はいつも励まされています」
と、哲平は言うのだが、同時に悩まされている事も事実であろう。真理に近づくという事はおおよそ諸刃の剣であるのかも知れない。現に真理を知ったかに見える乃木はこうして鬱病を患っているのだ。哲平は乃木の黙々とした姿に、未来の自分を見た気がした。
「そういえば、お母さんは元気？」
乃木の奥さんは哲平の母親とは昔馴染みである。
「ええ、元気にしていますよ。最近は私も一応働いているので、小

うるさい事も言わなくなりました。これも乃木さんに雇って頂いたお陰です」

「哲平君の事をいつも心配しているものね。たった一人の家族だもの。気に懸けないはずがないわよね」

「まあ、母は少し心配性というのもありますけどね。何より私がふらふらとしているのを心配していたみたいです」

と、自嘲気味に哲平は言ったが、さすがにこの時は「たった一人の家族」という言葉が身にしみた。考えてみれば、今の仕事も母親が世話してくれた仕事なのだ。母親がいなければ、自分は今どこで何をしていただろうか。「自分の道」に悩む事もなく、気楽に暮らしていたかも知れないし、逆に生きる意味を一人悶々と考えて暮らしていたかも知れない。それを考えると、悩みながらも良き相談相手に恵まれ、仕事にも就けている今の状態は最良の選択だったのではないかと、哲平には思えてくる。そういう道を期せずして母親が切り開いてくれたのだと思うと、「たった一人の家族」という言葉が重みを増してくるのである。と、その時、重い口を開き、乃木が言った。

「今日はもう帰りなさい。お母さんが心配しているかも知れない」

まさかこの歳になって母親に心配される事もないだろう、と哲平は思ったが、乃木の重々しい言葉から何か不吉な予感を感じて、すぐに帰宅した。自転車を飛ばして帰る道すがら、静かな夜道の途中で、哲平は何か雑然とした胸騒ぎを感じていた。親子の絆とは不思議なものである。

哲平が自宅に帰ると、母親が倒れていた。キッチンの鍋には哲平に食べさせる為のカレーが作ってあった。哲平はすぐに救急車を呼び、母親は病院に搬送されたが、既に手遅れであった。母親は元々、膠原病の持病があり病弱であったが、それが直接の死因ではないらしい。転倒したときのショックで気絶し、そのまま帰らぬ人となったのである。

哲平は今までの自分の行いを悔いた。しつこいくらいに自分を気

に懸けていた母親。うるさがる自分をものともせず、世話を焼いた母親。そういう母親を、自分は疎み、避けてすらいた。母親には自分しか家族がいなかったのに、それを分かってやろうともしなかった。哲平はまた一つ、生きる意味を失ったのである。

これが、哲平が優子に出会う三年と半年前の話、２００５年の９月の事であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7909r/

月見草

2011年10月8日22時07分発行